

7―ぼけさんが最高の案内人

(1) 愛に導かれて

ぼけたお年よりの問題行動は、ふつうおせわの仕方に問題があるから起こる。おせわの仕方で迷うとき、お年よりを見つめることのなから、その方法を見つけたという経験を幾度もした。

見つめるとはただ眺めることではない。もちろん傍観することでもない。しっかり見ることである。相手に近づいていき、相手の中に入ろうとする努力である。野草の名前さえそれへの愛着がなければ覚えられない。相手により近く、より深く近づくことは、愛がなければできない。愛があつてこそ相手の本当の姿が分かってくる。分かってくれば自ら方法が生まれる。通じあうからである。

ぼけさんのおせわに当たるとき、家族だったらどうだろうかと、自分を反省する。身内のようにとはとてもできないが、それでも身内ならばと、自分をそれになぞらえる努力を続ける。愛は努力である。反面、家族はおせわの仕方を看護の専門家から学ぼうとする。肉親のしがらみでますます混



乱し、傷つけ合っているからである。どうしたら冷静な対応、的確な方法がとれるかを専門家に期待する。そのことは正しい。

しかし、真実には、その両方、身内の如く、専門家の如くの双方を満たすものでなければならぬ。それは具体的には「受容」である。愛のないところに受容はない。知性のないところに受容はない。受容とは愛と知性の融合である。純粹教育愛の相を示す。純粹福祉愛の行を映す。秀れた心理学者ロージャーズはその著『カウンセリング』六章で、「クライエントこそ最上の案内人」といっている。クライエント（来談者）をお年より、ぼけさんに置き換えると、ぼけさんのおせわの仕方は、虚心にお年よりに近づくと、お年より自身の方から示してくれるということである。真実受容すれば、解決はその中にある。受容とは一人の人間として尊重し、あるがままに受け容れることであり、人間愛に基づくものでなければならぬ。

任運莊相談員三代茂子^{みしろ}は六十年代全国老人福祉施設大会で、「受容―それは工夫を伴うもの」というテーマで二例をあげて説明した。次にその中の一例を掲げよう。

(2) 母に泣く子ごころ

手当たりしだい口へ

Aさん（八十歳）は脳軟化症、重度の老人性痴呆です。激しい異常行動のため、長男夫婦の

争いの種となり、家庭崩壊寸前、五十五年任運荘に入居しました。問題行動の一つはけたたましい奇声。手当たり次第物を投げ散らし、何でも拾って食べます。一日中じっとせず、着物を引き裂き糸くずや綿をはぐし出してかみます。ふところにベーパーをつめ込み、引っぱり出しては口に入れます。ポータブルトイレはチリ紙の山です。裸でポータブルトイレの中に入ったり、便を所かまわず塗り付けます。

夜は更にひどく興奮し、寮母を蹴ったりひっかいたりかみついたりします。一晚中騒ぎ、ホーム全体に響き渡るので、「ここは精神病院じゃない」と、いっせいに苦情が出ます。

しかし、隔離室を設けることは最後の手段と考えています。夜間は寮母二人しかいないので、やむなく安定剤を服用させることもあります。翌朝はぐったりと眠り続け朝食も食わず、ろれつもまわらず、起きても足がふらつきます。だから、連用はさせられません。

Aさんはお風呂と歌が好きで、金色夜叉の歌は最後まで歌わねば止めません。音楽グループの一員です。昔話しをしたり、日記を書いたり、水分が不足するとイライラするのでお茶や果汁をあげてスキンスリップを心掛けます。それでもひどく不安定の際は、電話で息子さんの声を聞かせたり、ふるさとへ便りを書いてもらいます。日帰りドライブや一泊旅行などにさそいますと、一時的ですが、落ち着きをみせます。

ゴミよりリンゴ

四年めに面会にきた長女が軍歌を歌っている母を見て、泣きながら語りました。

「母が三十三才の時父が死に生活は悲惨でした。人が捨てた物を私たちに食べさせました。今、拾い食いするのは昔の姿を見るようでかわいそうでなりません。娘はお菓子を小さく割っては母に食べさせるのです。パクパク食べてはひっきりなしに求めるAさん。私は胸をつかれ、はっと気がつきました。

福祉とは相手の立場に立ってお世話することです。私はそのことを忘れていたのです。早速、リンゴを買い、食べやすいように刻んで、Aさんの手元におきました。Aさんは軍歌を歌いながらリンゴを食べます。リンゴがなくなると、奇声をあげたり、指につばをつけては食台の小さなゴミまで口に入れます。

私はリンゴがなくならないうちに皿に入れます。糸クズやゴミよりもリンゴを食べてほしい。それが子としての心であるはずで。

二カ月たってAさんが、「私にリンゴをおくれ」というのです。「糸クズとリンゴとどちらがおいしいですか」「そりゃあリンゴですわ」と、返事ははっきりしています。

受容とは、ひたすら相手の立場になって考え、そのまます受け入れることですが、具体的には、ほんのささいなことでも何か工夫していくことであるようです。

こうして、やがて「アッ、アッ！」という奇声も少なくなり、「寮母さん、寮母さん」と呼

んでくれるようになりました。着物を引き裂き、綿をかむという行為もだいぶおさまりましたが、今度は、つばを手の平いっぱいのために自分の髪に塗り付けるという行動に変わりました。これがまたすごい量ですさまじく、室内は異臭に包まれます。かわりに化粧水を与えても飲んでしまうのでだめです。

やはり解決策はスキンシップを絶やさないことです。相手をしてあげている間は、それに気がまぎれて異常行動は起こりません。食間の果汁も欠かしてはなりません。

しかし、やがて天の配剤ともいえる老衰が訪れます。あの激しい異常行動から三年半たった頃からベッドで過ごす時間が長くなり出します。もう安定剤なしで眠ります。食事は全介助で全部食べます。お味はとたずねると、「へえ、うまいですわあ」と答えてくれます。

こうして、ボケさんを通じて考えられることは、ただ相手の流れにそって、現実の世界に混乱し立往生して、閉ざしてしまった心を、受容することです。それを実際の行動に表わすと、限らないスキンシップということになります。

ボケさん達の異状行動の原因は何なのか、心落ちつく何かがないかと、何度も工夫し、温かく思いやる努力が大切です。「もし自分がこんな姿になったら」と思うと、いとおしさがこみあげてきます。

（三代茂子）

ぼけさんのおせわ25カ条

一 人格の尊重（受容とスキンシップ）

- 1 話す時はゆっくりと、礼儀正しく。
- 2 決して「いけません」と否定しない。
- 3 説得せず、時間をかけ相手の心にそうようにする。
- 4 子供扱いなどして、人間としての誇りを傷つけない。
- 5 本人の出来ることを認め、ほめる。
- 6 最後まで残る感情面を大切にし、快の感情をみたす。
- 7 手を握るなど、身体に触れて、心を落ちつかせる。
- 8 話し相手をし、聞き上手になる。
- 9 一日の行動を理解すると、おせわも一定の型になり
楽になる。
- 10 本人の前で、「ぼけている」とか、問題行動を批判
しない。
- 11 相手の立場にたって、なぜそうなのかをいつも考え
る。

二 清潔な生活環境（ひとらしくきれいにする）

- 12 おむつはぬれたらすぐ換える。
- 13 床ずれを作らない。
- 14 失禁を叱らない。声がけ、排泄介助を怠らない。
- 15 食事はベッドを離れて食卓で。
- 16 身辺に危険物を置かない。
- 17 世話する者の考えで、本人のものを勝手に片付けな
い。
- 18 夜は枕燈などをつけて明るくし、不安を与えない。

三 残存能力を保つために

- 19 頭を使う習慣から遠ざけない。
- 20 日、時などへの関心を持たす。
- 21 過去の思い出を大切にしておあげる。
- 22 気持ちの通じる友達をつくる。
- 23 骨折をさせない。
- 24 精神安定剤の服用には細心の注意を払う。使用中は
心身の変化を観察し、医師との連絡を密にする。
- 25 食事はバランスのとれたもの。果汁や水分の補給は
十分に。

(3) 嵐の一年

始めに重度者あり

十三年前、開所当初待ちに待った入所第一号はGさん（六二歳）だった。元憲兵で敗戦後帰国してみると、子を残して妻は他の男に走っていた。不幸はさらに重なる。交通事故で脳障害を受け、心身ずたずたにされる。かくしもっていた小刀で暴れたり、すさまじい異常行動の持ち主である。

その頃はまだ痴呆症とかボケの語は一般化されておらず、私たちにはいささかの知識もない。だから、Gさんのお世話はまるで格闘のようで緊張し続けの日々であった。眼を離すと、いつの間にかいなくなるので、職員一名はGさんに付き添って町中をぐるぐる歩かねばならない。「任運荘はあんなに元気な人を入れて」と非難も聞かれる。一日として安らかな日はなく、ついに他の老人をステッキで殴りつけ、大騒ぎとなり、福祉事務所、保健所との協議で精神病院行きとなる。そして、間もなく昇天した。

こうした重度者を迎えたことで、どんな人が来ても大丈夫だという気構えができた。しかし、それから十年目、私たちは再び力の限界を知らされる。

ながい日々

五十九年九月十九日、Aさん（八八歳）入居。診断書は「老人性痴呆」。同室の三人をみて、「うん、こりゃ、わしより重症じゃ」と。昼食時、お隣りのお菜を奪って他の人を慌てさせる。夕方、同室のSさんが「時計がない。タオルがない」と騒動する。それらはAさんのロッカーの中に入れられていた。捜し出した寮母に向かって、「わたしを盗っ人扱いするのか。警察に行って白黒をつける」と興奮する。

夕食後、隣りの部屋に入りYさん（九十歳）に、「ばあさん、いつまで寝ちよるんじゃ」と布団をはぎ、肩を打っている。「寮母さん、早よう来て」の悲鳴に寮母が駆けつけ、大事には至らなかった。「恐ろしくて眠れん。どうしてあんな人をホームに入れるんですか」と、Yさんは蒼白になって非難する。

「オーイ、わしん所で小便をしよるぞ」と呼び声上がる。

ベッドの上でお金の計算をしたり服を脱いだり着たり、午前三時やと寝る。五時頃よりまた徘徊が激しくなり、夜勤者は他の老人の世話が出来ないの、別の部屋に移す。「あんたらは夕べから飯を食べさせんでこげん所につめ込んじ、どげえするつもりか、警察沙汰で」と興奮し、止める寮母の手を振り切って外に出て行く。「おぼえておけ、警察を連れてくるぞ」ととなり、棒を振り回し、とてもそばに寄れない。

やっと朝になり、少しずつ落ちついてくる。「ここん味噌汁はうまい。もう一杯食べると笑

われるかのう」とおかわりをする。

ベッドで伸びたひげをそっていると眠りはじめる。足を沐浴し、カサカサした皮膚にオリブ油をぬりマッサージをする。

こころ和む時も

処遇検討会。――出来るだけ昼間は戸外に出るようにする。そして、持参した薬は当分服用しないで様子を見る。スキンシップを濃厚にし、気持ちを和らげることを第一とする。

翌日入浴。「こりゃ薬り湯じゃ。気持ちがいい」。おやつにお茶とダンゴをあげると、「こげん皆に大事にされていいんじゃないか」。面会に来た妻に、「ここんしはようしてくれる。けど、長げえ目でみらんと分からん」、「そんなうち、こなさるごとなるかわからんきのう」と告げている。

こうして毎日騒動を繰り返しながら数月が経った。朝のお祈りに参加したり、日記を書いたりするが、勿論心の集中は出来ない。

しかし、問題は夜である。夜勤寮母二人では昼間のように眼が届かない。他の部屋に入り寝ている人をゆり起こし、「おれん寝床じゃ、どけ」と怒鳴る。お茶をあげて寝かせる。しかし、ものの三十分とは眠らずゴソゴソはい出す。毎日がその繰り返しである。

首をしめ

ついに事件は起こる。同室のKさんは、いつも独り言をいっている。それを聞きとがめて、「何をバカにするんか」と怒り、とびかかり頬をひっかいた。

その後、「わしは飯を食べちゃらん」と何度も部屋を出て徘徊する。

夜九時、隣室に入りHさんの布団をはぎ「オレの寝床じゃ、起きろ」と枕で叩く。Hさん（婦人）は強度のボケさん、強くいわれると体が硬直して動くことが出来ない。それがさらにイライラさせてHさんの顔をひっかき、ついに首をしめてしまった。首にできたあざは一週間も消えなかった。しかし、Hさんは誰から暴力を受けたかも分からず、「恐かった」というだけである。夜勤寮母の緊張も極度に達し、仮眠どころではなくなる。

あけ方五時、寮母室からぬっと出てくる。「こりゃーうめえ」と石ケンを食べている。代わりのお菓子と取りかえると、「あげん匂いのいい物を食わせちくれん」と眼をつりあげ、手を振りあげなぐりかかろうとする。しばらくして激しい下痢。

夜、寮母室の医薬品を取ったり、しだいに行動範囲が広がっていく。寮母室の出入りにはいちいち鍵をかけなければならぬ。それでもAさんの布団の下には、いつの間にか色々なものが隠されている。

それから十日程たった夜明け前、八十二歳のGさん（婦人）を叩き十日間の内出血の傷を負わす。ついに職員会議で安定剤を服用さすことに決定する。

心身破壊されゆく

午後四時、病院の指示薬、錠剤一粒、粉薬一包服用。午後五時三十分いびきをかいて眠る。唇が乾いているのでオリブ油をぬる。夕食は八時、「体中が痛いんで、すまんが飯を食わしちよくれ」。介助にて全量摂取。「茶をくれんなあ」「おばあは何をしよるんじやろう。よそのお姉が親切に雑炊を食わしちくるんのに茶もささんで」。排尿介助後また眠る。薬服用のためか朝までよくねむる。しかし、目覚めると、水分の要求が多い。午前九時四十分リンゴジュースを薬のみ二杯飲む。またぐっすり眠る。午前十時、声がけると、「頭と胸が悪い。痛み止めの薬がほしい。わざわざよってくれてありがとう」。また眠る。昼食。「頭と胸が痛い。めしは食えん」と拒むが、助食で全量摂取。

午後二時、広場で行われた一泊旅行の打ち合わせに参加する。「さぬきの金比羅参りがよろう。別府はいくら金があっても足りるところじゃ」。

その後はほぼ一日おきに投薬が続けられる。足のふらつき著しく、見ていてつらい。尿介助していると、「ここで死のうか、帰って死のうか」という。薬が覚めると、ロッカーから物を出したりベッドの柵を投げたり、寮母室に入って手当たり次第物を持ち出す。夜通しの徘徊納まらない。

夜、外へとび出し、帰路、「もう歩けん」といって、寮母におんぶされながら、「夜中に起

きち回ったちにいいなさんなえ、笑わるるきなあ」という。老いゆくことへのいら立ちからか、荒れ、歩き回る。

老婦人を妻と思って、「起きて飯を炊け」と叱かり、手を当てる。正常と病の間を織りなす行動が、他の人に思わぬ危害を与えるのである。改めて病院へ診察に行く。医師は「この人は、前に入院させてくれと言われたが断わった人ですよ」。

薬の覚める前は、極度の興奮状態となり、徘徊も激しくなる。

性の昂進

園内の様子がよく分かってきたらしい。ついに、隣接施設騰々舎に足が及ぶに至る。女性の入浴をのぞいているのである。大騒ぎを知って寮母が連れ去ろうとするが、「うるせえ、いまい番いいとこなんじゃ」と動かない。こうして、「写真を盗られた」「化粧品がない」など、事件を続出させていく。「わしの自由がない。外に出れば連れ戻される。監獄に入ったようじゃ、女湯ものぞかれん、楽しみはねえ」と妻に電話で訴える。

若い女性の住む騰々舎への通交を固く禁じ、はっとしていたら、今度はHさんの横でその手を握っている。Hさんは重いボケさん。裾から手を入れられても知らん顔。回りの人たちがたしなめると、「やかましいっ。だまっちゃけ」と怒鳴り返す。こうした行為はすべて、入浴など寮母が多忙を極めている時を見計らって行われる。Hさんは足先までなめ回され、肌は絹

布のように薄く透き、血もにじむ。行為はいよいよエスカレートする。

しかたなく、Hさんをかくす。今度は寝たきりのKさん（九三歳）に眼をつけ、両足をかかえ上げたり、馬乗りになろうとする。Kさんの部屋の戸をロックし、職員は裏口から出入りするが、それも見破って侵入。Kさんのギャツという叫び声。足先にかみついたのだ。Aさんの唇には血がしたたっている。眼はぎらぎら、鬼の形相である。

投葉が性の極度の亢進を刺戟するのだろうか。覚醒時の性的異常さはついに他を害するようになった。ここには重度の障がい者の若き男女が平和に暮らしている。仕切る扉はない。危険は目前にある。もはや、一刻の猶予も許されない。

医師は強力な安定剤の連続服用を指示する。しかし、真っ直ぐ立っていた脚が曲がり、立てず、瞳はみるみる褐色に濁っていく。眼前に展開するこのような人間破壊を、誰が忍びうるか。

たとえ精神科医の指示の下とはいえ、強力な安定剤による人間の崩壊を続けることは、医療機関でもない福祉施設がすべきことではない。法的にも倫理的にも許されない。福祉事務所と家族に通報する。

福祉事務所は隔離でもしてほしい口ぶりである。「任運荘は鍵で閉じこめることはしない」と説明し、了解してもらう。家の人は事情がすぐ分かったらしい。困った病気の再発だと。

娘から、「タクシーで家に帰らせてくれ」との電話である。家族の迎えない退所は今度が初めてである。

まる一年の滞在だったのに、家族の迎えのないままAさんは去った。「あん雪ん山ん下に住むしのカカアが居るんで、よそん男からとられんじやろうか」と言っていたAさん。Aさんはすぐ精神病院へ行かされた。